

なく、德行は日々に衰ふべしと、かたく誠めければ、文伯その誠を守り、是より友を撰びて己より優れる者にのみ交りければ、德行ますます修まり、學問いよく進みて、遂に其の名天下に顯はるゝまでに至れり、

第六十二

韓信

前漢の韓信家貧しくして、城下に釣せしことあり、時に漂母あり、信の食事をもなすこと能はず、大に飢うるを見て、信に飯を與へけり、信漂母に謝して曰く「我れ他日志達せば厚く母に報へんと、漂母の曰く「吾れ王孫を哀みて食を進むるのみ、豈報を望むものならんや」と後に信は漢の高祖を輔けて楚を滅ぼし、楚王に封せらるゝに及び、漂母を召して、千金を贈り、飢に飯したる徳に報ひたりとぞ、

又韓信の未だ志を得ざりし時、市に出でたるに、少年輩集りて之を侮り辱めて曰く「汝好みて劍を帶ぶるは何の爲なるぞ、人を殺さんが爲か、人を殺さんとならば速に我を殺せ、若殺すこと能はずば我が跨下より出でよ」と、韓信之を熟視して、終に跨下より這ひ出でければ、市中の人々皆大に笑ひけり、後に楚の王となりたる時に語りて「吾れ曩に小人の辱を忍ばず怒に乗じて人を殺さば、焉ぞ今日の富貴を得んや」と曰ひしとなり、

第六十三

斑超

漢の斑超の幼きとき、ある相者ありて告げて曰く「此の子は燕の領の如くにして虎の額の如くなれば、萬里侯の相なりと、ある時父彪の書を著すを見て、筆を投じて嘆じて曰く「大丈夫は當に功を異域に立て封侯の印を佩ふべし、安ぞ久しく筆硯を事とせんと、明帝の朝に西域に使し、三十六人の吏士を以て鄯善、于寔、疏勒の諸國を服従せしめ、遂に定遠侯に封せられたり、

第六十四 臧洪

後漢の臧洪は字を子源といふ、年甫めて十五歳なる時童子郎の官を拜し孝廉に擧げられたり、その體貌は魁梧にして異姿あり、時に董卓帝を殺し、袁紹なるもの、洪を東都に圍みけるに、城中既に糧盡きしかば、鼠を堀り、筋角を煮て食ひしも、遂には復食ふべきものなきに至り、城遂に陷るに及び、男女七十八人相枕して自盡し、絶えて一人の離叛するもの無かりし、紹洪を執へて曰く、今は果して服するや否や、洪聲に應じ、眼を見張りて曰く、惜むらくは力足らずして天下の爲に仇を報ゆること能はざるを、何ぞ服することを謂はんと、紹我が用をなさざるを知りて、遂に命じて殺さしめたり、

第六十五 楊政

宋の楊政の父楊忠は、金國の兵と戰ひて死せり、時に政は年甫めて七歳なりけるが、悲み慕ふこと成人の如く、水飲も口に入らざることを數日なりき、其の母これを見て、親に孝あるものは、かならず君に忠ありと、古人も言れたり、此の兒後には忠臣とならんと、いひけるが、後に果して金の兵を撃ち破り、終に大尉の官となれり、

第六十六 李白

唐の李白は、匡山に在りて書を讀みけるが、學業未成らずして、漸く怠りを生じ、業を棄て歸る途中に、一老嫗の斧を石に當て、磨けるものに逢へり、李白止まりて之を見るに、其の何を爲す故なることを解せず、近寄りて、其の次第を問へば、針となさんとて磨けるなりと、答へけり、李白其の忍耐の厚さに感じ、再び匡山に歸りて、日夜勉強し、遂に有名の詩家となれり、

第六十七 任敬臣

唐の任敬臣は字を希世といひ、五歳にして母を喪ひ、哀毀悲慟せり、七歳なる時その父英に問ふて曰く、『何を以てか亡き母に報すべきと、父の曰く』名を揚げ親を顯はさば可なりと、乃ち志を勵まして學に従ひ、博く群書を極め孝廉に擧げられて著作郎に任ぜらる、後に父の憂に丁りて哀しみに勝へず、水飲だも口に入らざることを三日なり、服を除きて官に遷り後に弘文館の學士となりぬ、

第六十八

趙武孟

唐の趙武孟は少きとき遊獵にのみ耽り、父兄の訓誡をも意とせざりしが、ある日獲たる所の肉をその母に饋りしに母泣きて云ひけるは、『汝書を讀むことを好まずして斯く放逸なり、吾れ何を希望まんどて、その肉を捨て、食はざりし、武孟之に感激して志を改め遂に力學して大に名をなしたるが、後臺侍御史となり、河西人物志を著はせり、

第六十九

歐陽修

宋の歐陽修は四歳にして父を喪ひ、母鄭氏に養はる、家甚だ貧しくして、修に字を教ふるに荻を以て地に畫せしめたり、修稍長するに及びては書を寫さしめ、或は人に借りて之を讀ましめられ、斯くの如くにして刻苦勉勵一日も怠ること無かりしかば終に學成り、知諫院の職に陞り、學問文章を以て世に重せられぬ、

第七十

范仲淹

宋の范仲淹は字を希文と云ふ、少くして友人と長白山の僧舎に在りて學を修めけるが、家貧しく學資に乏しきを以て、粟を煮て粥となし、之を一の器に盛り、一夜を経て遂に凝れば、劃して四塊となし、早晚二塊宛を食せしとなり、又蘆十數莖を斷ちその中に酢の汁を和し、煖めて之を啗ひ、此くの如くにして學ぶこと三年なりしが、後に兵部尙書となりて魏

國公に封せられたり、

第七十一 晏殊

宋の晏殊は七歳の時に既に大人も及ばざる程に文學上達せりとて、その名聲大に喧しかりしかば、天子よりも特に召せよとありて、他の大人と共に朝廷にて試験を受けぬ、この時の受験者は大凡千餘人なりし故、通常人なりせば氣後れして、常には善くせし事も善くせざることも多かるべきに殊は心剛く勇氣鋭くして、文題出づるも少しも憚るゝこと無く、筆を執りて直に作り出せしを見て天子にも大に感賞せられしとなり、後二日を経て再召し出されて、詩賦論を試みられしに、その題を見て『既に同じ題にて賦を作りし事あり、願はくは他の賦にて試みられよといひければ、その欺かざるを嘉みして直に官を授けられたりといふ、

第七十二 寇準

宋の寇準少き時疎暴にして少しも禮節等を修むることなかりしかば、その母屢之を止むることあれども、悛めず、日々飛雁走馬を事とせり、母の性甚だ嚴なりしゆゑ、或日母の意に忤ひたるとありしに、母怒りに堪へず、秤錘を擧げて投せしに、錘飛んで準が足に中りて血を流すことを甚だしかりし、準は是より自ら抑遜して粗暴の性を矯め、書を讀を好みて遊戲に耽らず、終に孝子を以て稱せられ、名相となれり、その貴きに至りては、母既に死せしかば、毎にその瘡の痕を捫して泣き、母の情の厚きを追ひ慕ふこと屢なりとなり、

第七十三 許衡

元の許衡七八歳にして學を郷の師に受く、讀書一たび目を過ぐれば忘れず、一日その師に問ひて曰く、『書を讀むは何を欲するが爲なるかと、師の曰く、『試験に應じて及第するに在り、衡の曰く、『斯くの如きのみか師大

に之を奇とせり、後元に仕へて大學士となり、魏國公に封せられぬ、

七十八

第七十四 邴原

魏の邴原は年十一にして父を喪ひ孤となり、家甚だ貧し、隣家は學校なりしが、邴原あるとき其の傍を過ぎて讀書の聲を聞き、さめ／＼と泣たるを教師訝りて『童子は何事か悲しくて泣くぞと問ふに、邴原答へて』我嘗て聞きぬ、孤者は傷み易く、貧者は感じ易しと我幼くして父を失ひたるを以て今に至るまで未だ嘗て學問と云ふ事を知らず、今讀書の聲を聞きて覺えず、涕を落したりといふ、教師聞きて甚だ之を憐み、然らばなぞて書を讀まざるやと云ふに、邴原『家貧しくして學資無しと答ふ、教師また』童子果して學問をなさんと志あらば我汝に教へん、學資は要するに及ばずといふに、是より邴原日々此の教師の許に通ひて勉強し、遂に一冬の間に孝經論語に通じたり、年既に長するに及びて、更に遊學せんと思ひ立ち、獨書笈を負ひて千里の遠きをも憚らず、安丘といふ處に至りて孫松といふ人を師と仰ぎ、また陳留に至りて韓子助を師とし、潁川に至りて陳仲弓を師とし、汝南に至りて范孟博に交り、涿郡にては盧子韓に親しみけり、此の頃北海の鄭玄といふ人甚だ盛名ありて、學者の宗師と仰がれしが、邴原は後輩の貧學を以て未だ數年を出でざるに、其の名既に鄭玄に齊くなりけるといふ、

第七十五 皇甫績

皇甫績幼くして孤なり、因りて外祖の韋孝寬に養育せらる、ある日諸外兄と惡戯せしかば、孝寬其の業を惰るを以て、之を嚴重に呵責せしが、獨績のみ幼くして孤なるを憫み、特に之を宥したり、然るに績の曰く『我れ庭訓なくして外氏に養はる己に克つことを勵まずば、何を以てか成立せんと深く自ら感激し、左右の人に命じてその身を杖たしむること三

七十九

十なり、是れより精を勵まし學を勉めて經史を研究せりといふ、

第七十六 路溫舒

前漢の路溫舒といふ人は、幼少の時父の命を守りて羊を牧ひ居たりしが、暇あれば澤の中に入り、蒲を茹り集め、草紙を編みて書を習ひ、遂に熟達して監獄の吏となりぬ。職務の暇には法律を學びてその義理に通じければ、遂に獄長となりて、縣中に疑はしき事あれば必問はるゝに至れり。太守之を聞き擢で、裁判官と爲せしに、閑暇あるときには、書を手にして釋てず、後に春秋といふ書を學びて又その義に通じ宣帝のときに臨淮の太守となりしとぞ、

第七十七 祖瑩

後漢の祖瑩は、八歳にして書に耽れり、父母その病を起さんことを憂ひて之を禁せしかば、瑩は火を灰の中に藏し置き、父母の熟睡せしを候ひ、竊に起き出で、衣服を以て窓を塞ぎ、書を讀みて夜の明くるをも知らざりけり。故に内外の親屬呼びて神童とせり。孝文帝之を聞き召し入れて五經の章句を讀ましめ、並に大義を陳せしめしに、明瞭に答へしかば、聞く者感動せざるものは無かりしと云ふ。長じて後名位共に顯達せり、

第七十八 呂祖謙

呂祖謙少き時、性質粗暴にして、飲食にても、一も意の如くならざるものあれば、便ち家什を打ち破り、家人皆之を患ひたり。後久しく病みしかば、只一冊の論語を執り、早晚之を讀み、忽ち覺り得て意思一時に平に、是より學を勉め、終身暴怒せず。後高貴の人となれり、

第七十九 皇甫謐

晋の皇甫謐少くして學を好まず、遊蕩度無きを以て人皆癡となせり。叔母任氏之を憂ひて、屢教へ諭すことありけれども、少しも改むる心なく、

ますく、甚しければ、これを見るに忍びず、膝下に呼び寄せて、痛く責めて涙を流し、道理を説き聞かせしにぞ、始めて感激し、夢の覺めし心地せられて、郷人席坦に就きて學を修め、孜孜兀々勉めて懈ること無きに至れり、然れども、謚家貧しく、身自ら稼穡するに必ず經書を帶びて鋤き間斷あると無かりしとなり、後遂に大儒となり、世號して玄晏先生と爲せり、

第八十

李密

隋の李密は少きより學を嗜み、蒲韞を以て牛に乗り、漢書一帙をその角上に掛けて行く、且讀めり、越國公楊素といふもの適途に見て、何ぞ書生の勤むること此の如くなるぞ、曰ひしかば、密は素を識り居たるを以て、下りて拜すれば、素その讀む所は何なるかと問ふ、密答へて、頃羽が傳なりといふ、素大に之を奇とし、與に語ること暫くなりしが、後に薦めて内史と爲せり、隋の末天下大に亂れしとき、密は兵を雍丘に起し、魏公と稱せり、

第八十一

蘇孤山

蘇孤山は近世の碩儒なるが、幼き時その氣質輕躁にして、舉動遽忙なりしかば、其の父論語の語を引きて之を叱り、君子重からざれば威あらず、學も固からずといひしことありしが、孤山既に長じて將に他邦に遊學せんとせし時、送別の辭を諸友に乞ひしに、李紫溟といふ人の贈りたる語は、不圖同じ論語の語なりしかば、孤山之を見て大に歎息していひけるは、予が性質輕躁の失あり、故に先君既にこれを徵兆の時に察し、紫溟またこれを已に形はるゝの後に現したり、愼ますんばあるべからずとて、これより其の書齋を名けて重齋といひけり、

第八十二

范純仁

宋の范純仁年少きとき、父仲淹の命を受けて姑蘇に至り、麥五百斛を受け取り、舟に載せて丹陽に至りたるとき、友人石曼卿に逢ふ。曼卿の曰く、『我れ家族三人を喪ひ之を葬らんとすれども、貧にして葬ること能はず、然れども他に謀るべきもの一人として有る無し、唯胸を推して悲しむのみと純仁之を聞きて、載せ來りたる麥を與へて葬らしめ、己は單騎にして歸り、父を拜して具さに曼卿窮困の事を語りしかば、仲淹の曰く、『何ぞ彼の麥を以て之に與へざると純仁の曰く、『兒已に與へぬと、仲淹は之を聞きて、其の朋友に厚きを嘆稱したりといふ、

第八十三 哀王冲

魏武帝の子に倉舒と云ふ人あり、後に鄧の哀王冲と云ふ、少き時才氣人に勝れて非常の智あり、吳王孫權嘗て巨大の象を武帝に獻ず、武帝其の重さを知らんと欲し、群臣に問ふに、衆敢て答ふるもの無し、倉舒時に僅に五六歳側に在りて曰く、『先づ象を船に乗せ、船脚の沉む所を記し、後物を以て之に積み換へて量らば容易に知ることを得べしと、武帝大に悦び、即之を行ひしと云ふ、

第八十四 司馬温公

支那宋朝の名臣に司馬温公といへる人あり、幼きとき、多くの童子と共に、或家の庭にて遊び居れり、その庭中に、大なる甕に水を充てたるものありしに、一人の童子、其の甕に攀ち登りて、甕の縁をまはり歩みて戯れ居たりしが、圖らずも足をふみはづして、甕の中に落ちたれば、多くの童子等如何はせんと、狼狽して騒ぐのみにて、救ひ出すべき工夫とては無かりけるに、温公は、手早く大なる石を拾ひ來りて、其の甕をうち碎かんとしければ、他の童子等また打ち驚き、『之を碎きたらんには、主人の怒りに觸れなんと云ふに、温公は、『一の甕をくだくは至つてかろし、人の命は

至つて重しといひもあへず、石をなげうちて甕をくだき、溺れたる童子を救ひける、この温公生長の後朝廷に仕へて宰相となり、彼の資治通鑑といへる、大歴史をも著はせり、
司馬温公又幼き時青胡桃を弄び居れり、側に姉も共に遊びて居たり、姉はその皮を脱せんと欲して、百方にすれども脱することを得ずして、その場を立ち去れり、一人の家婢來りて、熱き湯を胡桃に澆ぎたりしかば、忽にして脱することを得たり、姉復來りて「誰が胡桃の皮を脱せしか」と問ひしに、光は聲に應じて「吾自ら脱せしなり」と答へしかば、その父適家婢の皮を脱せしを見居たりしゆゑ、呵りて「小子何ゆゑに妄りに語を發するなるか、その皮は家婢の脱せしなるべし」と謂ひしかば、光大に畏れ是より後は敢て虚言せざりしとなり、

第八十五 劉恕

宋の劉恕少くして穎悟書を讀みて目を過ぐれば誦を爲せり、四歳のとき、座客孔子に兄弟無しと言ふものあり、恕即聲に應じて曰く、「その兄の子を以てこれに妻はすと、一座の人々皆驚き奇童とせり、長ずるに及び、仕へて和川の令となれり、

第八十六 閔損

魯の閔損早く母を喪ふ、父後妻を娶りて二子を生む、繼母は損を惡みて、その二子をも愛し、二子の衣は綿絮なれども損に衣するに蘆花を以てせり、父一日損をして車を御せしむるに、損冬日の寒さに體凍て、刺を失ふこと再三なりければ、父怪みてその故を問ふに「只過ちて之を失ひ落せるなり」とのみ答ふ、然れども父は早くも後妻の常に損に薄きを推知し、大に怒りて妻を去らんとせしかば、損は大に驚き泣く、諫めて曰く「兒は既に長せり、如何なる苦痛も以て意となさず、母家に在せば

こそ幸にして二弟の健全を保つことを得べし、もし母にして家を出でば兄弟三人皆共に苦痛を受くるに至らんと、父はその言に感じ遂に去ることを思ひ止まれり。繼母も亦之を聞き悔いて慈悲深き母となり、三子を待つこと均しくせりといふ、

第八十七 許坦

唐の許坦は新安縣の人なり、年十歳の頃父に従ひて深山に入り、藥草を採り居たるに、猛虎あり、俄に來りて父を噛みければ、坦は泣き叫びて、操る處の杖にて力の限りこれを撃ちしかば、虎恐れて逃げ去れり、父は之によりて全きことを得たり、太宗皇帝これを聞きて群臣に宣ひけるは、『許坦は幼童なれども、よし身命を委て、父の危きを救ふ至孝嘉みすべしとて、帛五十疋を賜ひけり、身命をもかへりみずして、これに臨めば猛虎もこれを畏る、孝行の徳は大なりといふべし、

第八十八 丁蘭

漢の世に、河内の人にして丁蘭といふものありしが、少くして父母を喪ひ愛慕の念止め難く、且つその奉養すること能はざるを打ち歎き、木を刻して肖像を造り、朝夕これに向て禮拜し、恰も生ける親に事ふると同じく事あれば、辻占を以て木像に伺ひ如何を決するを常とせり、

第八十九 蔡順

漢の蔡順少くして父を喪ひ母に事へて至孝なり、時に王莽の亂に遭ひ、歳荒れて給せざりしかば、桑椹を拾ひて之を二つの器に盛りしを、赤眉の賊見て之を問ふに、順は答ふるや、『黒くして能く熟したるものは、母に奉じ、赤きものは順自ら食ふなりと、賊その孝を憫みて、白米三斗と牛蹄一隻とを恵み與へしとぞ、

第九十 吉玃

梁の吉翬の父は武原郷の令たりしが、姦吏の爲に誣ひられて罪に坐し、死に當りぬ、ときに翬は年十三なりしが、登聞鼓を搥ちて父の命に代らんことを切に乞ひて止まざりしかば、朝廷人の之を教へしならんと疑ひ、廷尉をして盛に拷問の具を陳列せしめて、之に示せしかど、翬は堅く執りて變せざりしゆゑ、乃ちその父の罪を覆審して、遂に宥せしとぞ、

第九十一 韓伯瑜

支那の韓伯瑜と云ふ人は、その母に答たるゝ事あれども、常には泣かざりしが、或時復た過ちありて、答たれたるに、泣き叫びたれば、母恠みて其の故を問ひけるに、『是れ迄は答たるゝ度、毎に身に痛かりしかど、此の度のいたからぬは、母の年老いて力衰へ給へるが故なりと思ひ、自ら心弱くなりて泣き出せるなりと答へたり、

第九十二 王僧孺

支那の王僧孺は、幼稚のときより、類稀なる孝子なり、五歳の時に孝經を讀み得るに至れり、或日、親戚より菓子を贈りたることあり、その人王僧孺の幼少なるを見て、速に得んことを欲するならんと思ひ、先づ數顆を出して與ふるに、受取らざりしかば、その故を問ふに、『凡吾が家に到來物ある時は、之を宗廟に捧げ、父母之に次ぎ、その次ぎは兄なりとありければ、その人大に感服し、直に父に呈せしに、父は之を受け取りて、宗廟に捧げ、數顆は父自取り、その餘を悉く與へしに、父の食するを待ち、始めて喜びて共に食せりと云ふ、

第九十三 王祥兄弟

支那の王祥は、瑯琊の人なり、稟性至孝なれども、不幸にして早く母を喪ひたり、繼母數之を父に請しければ、その父これを惡みて、毎に牛下を掃除せしむ、然るに祥は愈謹みて、若父母の病ある時は、晝夜衣帶を解かず、

湯水は必自ら嘗めて後に進めぬ母嘗て生魚を食せんことを欲しけるが、天寒くして水凍りたり、祥はこの寒天を事どもせず衣を解きて氷を割き、之を求めんとせしに、氷忽ち自ら解け、雙鯉奮躍して出でしに、ぞ祥喜びて之を捕へ、家に持ち歸りて母に供したり、母復黄雀の炙りものを欲せしに、數十羽の雀飛びて其の幕に入りければ、直に捕へて母に供せり、庭に丹柰あり、實を結ぶ、母命じて之を守らしむるに、風雨ある毎に祥は樹を抱きて泣きぬ、こは風雨の爲めに丹柰墜落して母の意を傷はんことを恐れてなり、然るに、一の落つるもの無し、郷里の人之を聞きて驚嘆し、以て孝感の致す所とせり、

王祥の弟に王覽といふあり、覽の母は祥の繼母なりければ、母は覽のみを愛して、屢無道を以て祥を苦しむるも、覽は兄に事ふること、少しも怠らず、母もし時として祥を咎つことあれば、覽必ず泣きて諫むる故に、母の無道も少しは止む事ありけり、母の祥を苦使する毎には、覽必ず兄とその事を共にし、また非理を以て祥の妻を苦使する時には、覽の妻も往きて同じくその事を共にする故に、母も詮方なくて、苦使する事を止めたり、後祥が譽高くなりたるを、母疾みて暗に毒酒を飲ませて殺さんとしたるを、覽は早くも察して其の酒を取らんとするを、祥は與へざりしかば、覽強て奪ひてこれをうち反せり、それより後は母の祥を毒殺せんことを恐れて、母より祥に食を與ふれば、必まづ嘗めて驗みし故、母も遂に毒殺することを得ざりしなり、かく兄弟互に孝行友愛の心深きによりて、その名各顯れて、祥は太保に進み、覽は後に光祿大夫となれり。

第九十四 黄香

支那後漢の世に、黄香といふ人ありしが、博學にして能く文を作り、天下無雙と稱せられ、後に擧げられて高位に昇れり、此の人九歳のとき母を

喪ひ、之を慕ひて肉落ち骨見はるゝに至る。父に事へてよく力を竭し、我が身は冬の寒さを凌ぐ程の衣服なけれども、父には滋味の物を供し、夏天の暑熱劇しき時には扇を以てその枕邊を涼しくし、冬日の寒氣甚しき時には己の小さき身を以て席を温むるなど、孝養至らざるところなかりしかば、時の帝之を嘉して、特異の賜を加へ、門に旌してその孝を賞せり。

第九十五

孔融

後漢の孔融は字を文舉といひ、四歳にして恭讓の性あり、諸兄と共に梨棗を食せし時に、自らその小なるもののみを取り食するを以て『梨棗は大なるは甘きに何故小なるを撰み食するかと問ふ者ありければ、融は答へて』我も大なるものゝ甘きは知れども、我は小兒なれば、當さにその小なるものを取るべきなりと云ひしに、ぞその人大に感じ、宗族の者も皆奇とせしに、長ずるに及び、果して其の名高かりしと云ふ。

第九十六

孫叔傲

昔支那に孫叔傲といふ人あり、年幼りし時、遊歩より歸り、憂ひて食事をもせざりしかば、母恠みて其の故を問ふに、泣き對へて曰く『今日、兩頭の蛇を見たり、恐らくは死を去ること日なからん、母の曰く『蛇は今いづくにあるか、曰く『兩頭の蛇を見るものは死すと聞きしが、故に他人の復之を見んことを恐れて殺して之を埋めたり、母の曰く『憂ふること勿れ、汝は死せざるべし、語に之あり陰徳あるものは天之報ゆるに福を以てすと、今汝は他人の見んことを恐れて殺して之を埋むるは、即陰徳なり、天必ず汝を棄てざるべしと、その後遂に高貴の人となれり、

第九十七

張禮兄弟

漢の時に大饑饉あり、菜蔬米穀共に絶たれば、人と人と相食む程なり、

其の時張禮といふ人あり、一日弟の孝と共に他に行きしに途中にて盗人に遇ひぬ、盗人ども口々に『これを殺して喰はんといふを聞きて張禮のいへるは』家に老いたる母ありて未だ朝飯せず願くは我等の歸りて食を供するを得せしめよ供へ終らば乃ち來りて死に就かんと弟の曰く『兄は瘦せたり、孝は肥なり、乞ふ兄に代りて死なんと、兄またこれと争ふていひけるは』吾はもと殺さるゝ事を約せり、弟を殺すことなかれと互に死を争ひて止まざりければ盗人共も大に驚き感じ、兩人を許したりといふ、

第九十八

朱娥

宋の世に朱娥といへる女あり、その母早く身まかりて祖母に養はれたり、蛾が十歳のとき、その里に朱顔といへるものあり、祖母と不和なり、ある日朱顔刀を閃めかして祖母を殺さんとせしが、一家驚き恐れて皆逃げ去りしに、蛾獨泣き叫びて祖母を後にかこひ、手にて顔が衣を引き、その身を以て顔が刀を厭し、寧ろ妾を殺すも祖母を救し給へどて、頻りにこれを隔でける程に、身は數ヶ所に傷を負ひしかども、なほ顔の衣を引ききて放たざるより、祖母は辛ふして逃れたり、顔恚りて蛾が喉を刺してこれを殺せり、その事上に聞えければ、粟帛を朱の家に賜ひけり、その後會稽の令娥が孝義を思ひ、その像を古の曹娥が傍に立てしと云ふ、

第九十九

緹縈

漢の太倉令淳于公罪ありて刑に當り、長安の獄に繋がれたり、淳于公男子無くして女のみ五人ありけるが、行くに臨みて罵りて曰く『女を生みて男を生まざれば、緩急の際に益なしと、其の少女の緹縈泣き悲み、隨ひて長安に至り、上書して曰く』妾が父は吏たり、齊中皆その廉平なりと稱せり、今法に坐して刑に當る、死するものは復生くべからず、刑せらるゝ

ものは復屬すべからず、過を改め自ら新にせんと欲すと雖ども、其の道由なし、妾甚だ之を傷めり、願はくは官婢となりて、父の罪を贖ひ、自ら新にすることを得せしめよと、天子其の意を憐れみ、令を下して肉刑を除けり、

第百 文姫

後漢の世に蔡邕といへる人あり、文姫といへるは其の娘なり、文姫六歳の時、善く音律を聞き、別けぬ、その父ある夜、琴を調べし折、その一の絲切れし、也、間を隔て、居たる文姫に、『いづれの絲切れしかと問ふに、文姫答へて、『それは第一の絲なりといへり、父訝りて思へらく、『文姫が言葉折よく當りしならん、故らに又四の絃をきりて問ふに、『第四の絲なりと答へたり、年二十の頃、胡の軍兵の爲に捕へられしを、魏の曹操、文姫が父と知りあひなりしにぞ、數多の金銀珠玉を胡人に與へ、文姫が身を贖ひて歸れり、曹操、文姫に、『父が遺書は如何せしかと尋ねければ、文姫答へていへらく、『父の書は妾が捕へられし折失ひき、されども四百餘篇を覺ゑたりとて、直に之を記して一字も遺さざりしとなり、

明治廿五年三月二十日 印刷
同 廿一日 出版

定價金拾錢



版權所有

編輯
行輯
人筆

高橋省三
東京市神田區錦町二丁目五番地

印刷人 三井駒治

全 京橋區弓町廿四番地耕文社

發賣所 學齡館

全 神田區錦町二丁目五番地

吉松 黒田小學校高等二年 普普通行
善善善 黒田學子 高橋 森

亞志源太

河内山内學子

吉平殿

馬竹三郎

山内學子

